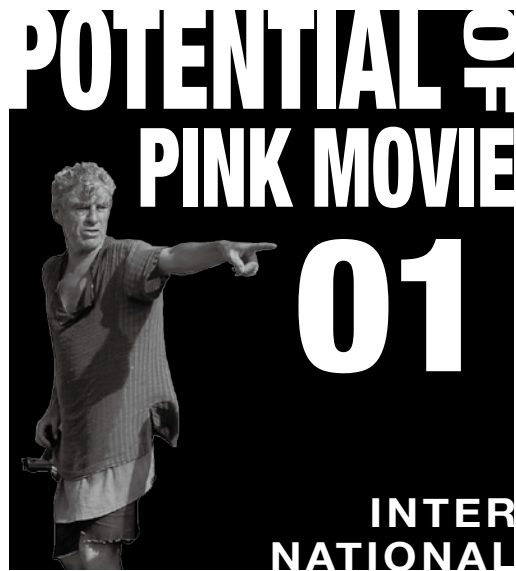


ピンク映画界にこんな時代が来るとは、誰が予想したのだろうか？ いまおかしんじ監督の最新作『おんなの河童』が日独合作で製作され、しかも撮影を、おしゃれ女子が大好きな香港のウォン・カーウアイ監督作品などで知られる名カメラマン、クリストファー・ドイルが務めるなんて。もっとも、一番驚いていたのが当のいまおか監督で「まさかドイルと仕事をするなんてビックリです」と嬉しさを隠せない。仕掛け人は、ドイツの配給会社「ラビッド・アイ・ムービーズ」のステファン・ホール氏。同社はアジア映画を積極的にドイツで紹介しており、日本映画への造詣も深い。その守備範囲は、世界のキタノ、こと北野武監督『Doors』(02)から女池充監督のピンクコメディ『花井さちこの華麗な生涯』(04)まで幅広い。とりわけ、学生運動もリストラも、その時代をすべてエロで斬ってきたピンク映画という日本特有のジャンルに興味を持ち「こんなユニークな映画文化を持っている国は他にはいない。ぜひ、世界に発信したい」と一大決心。ドイツでのポリウッド映画ブームで稼いだ資金を元手に、3年前、ピンク映画の老舗・国映に共同製作を持ちかけた。

古来の妖怪・河童が主人公である。高校時代に沼で溺れた哲也(梅澤嘉朗)が数年後、河童の姿で初恋の女性・明日香(正木佐和)の前に姿を現した。しかし佃煮工場で働く明日香は、経営者の滝(吉岡睦雄)と結婚間近。哲也と滝の間で心揺れる乙女心と、哲也の童貞心が交錯するキュートなラブストーリーだ。念のため、ホール氏に「河童って、海外でも有名?」と訪ねてみたところ、「いや、全然。でも皆、新種のクリーチャーだと理解してくれるんじゃないかな」とのお答えが。さすがは、いまおか作品を理解するホール氏。細かい事より面白ろさやいいじゃん!の精神をお持ちのようだ。

怖いモノ見たさで、2010年6月25日〜7月1日に行われた撮影現場を覗いてみた。この日は佃煮工場で、作業服を着た明日香たちが軽快な音楽に乗って、日常の鬱憤を歌い上げるダンスシーンを撮っていた。そう、本作は何を隠そう、いまおか監督初のミュージカル映画でもあるのだ。意外にも(?)ミュージカルの名作『サウンド・オブ・ミュージック』が好きだといまおか監督の趣向を取り入れたいらしい。そこに本作の主旨、変装をして佃煮工場にアルバイトに来た河童が登場。特殊造形を

監督に指名されたのは、ホール氏が「おじさん天国」(成人館公開題『絶倫絶女』)と『たそがれ』(同『いくつになってもやりの男と女』)のドイツ配給を手掛け、お気に入りのいまおか監督。カメラマンを、世界配給も考えてせっかくならば大物を!とダ



日本とドイツ
その幸福なる出会い

メもとでドイルに依頼したところ、関係者もビックリの「OK」という返事が。「おんなの河童」のアソシエイトプロデューサーの相原裕美さんが浅野忠信主演『地球最後のふたり』(03)でドイルと一緒に仕事をしているという強力なコネクション

があったのだが、どうやら交際の彼女の「ワタン、日本に行ってみよう」という一言が効いたようだ(笑)。とにかく、この夢のコラボが国映創設50周年に当たる2010年に実現するとは、感慨深いものがある。

こう書くと、何やら高尚でインターナショナルな香りが漂うが、中身はいつものピンク映画の製作体制であり、いつものファンタジックないまおか作品で、ヘンに背伸びしていないところがいい。何てったってタイトルからも分かるように、日本

井口昇監督『片腕マシガール』で知られる西村喜廣氏が手掛けているのだが、あまりのリアルさに撮影現場は爆笑。この河童と一戦交えることになる、明日香の同僚・麗子役の成田愛に至っては「私、この河童とチュウするの!」と笑いが止まらない。その笑いの渦にドイルも参戦。どうやらドイルは奮井そら作品で予習してきたらしく、女優陣に物欲しげに男性を見つめる視線など、自ら演出するほどのノリノリぶりだ。ドイルが言う。「ピンク映画だろうが皆、プライドを持って仕事をしているのが素晴らしいネ」と。

日本におけるピンク映画の現状は厳しいが、海外では今、特集上映が組まれるほど熱い視線が注がれている。本作の試みが、ピンク映画の新しい活路を見出してくれよう。



いまおかしんじ
1965年、大阪府出身。獅子プロダクション入社後、瀬々敬久監督らの助監督を務め、『獣たちの性愛』(95)でデビュー。『痴漢電車 感じるイボイボ』(96)や『たまもの』(04)など、ピンク映画界でもその作家性で異彩を放つ。

クリストファー・ドイル
1952年、オーストラリア出身。80年代からウォン・カーウアイ作品の撮影監督として名を馳せる。そのほか、チャン・イーモウ、ガス・ヴァン・サント、ジム・ジャームッシュら気鋭作家の撮影を担当。



Shinji Imakawa × Christopher Doyle

取材・文/中山治美
©Takatoshi Naoi